

ひょうご 水百景

No.131-2 神通川水系松川（富山県富山市）

～歌川広重が描いた日本一の『越中富山船橋』～

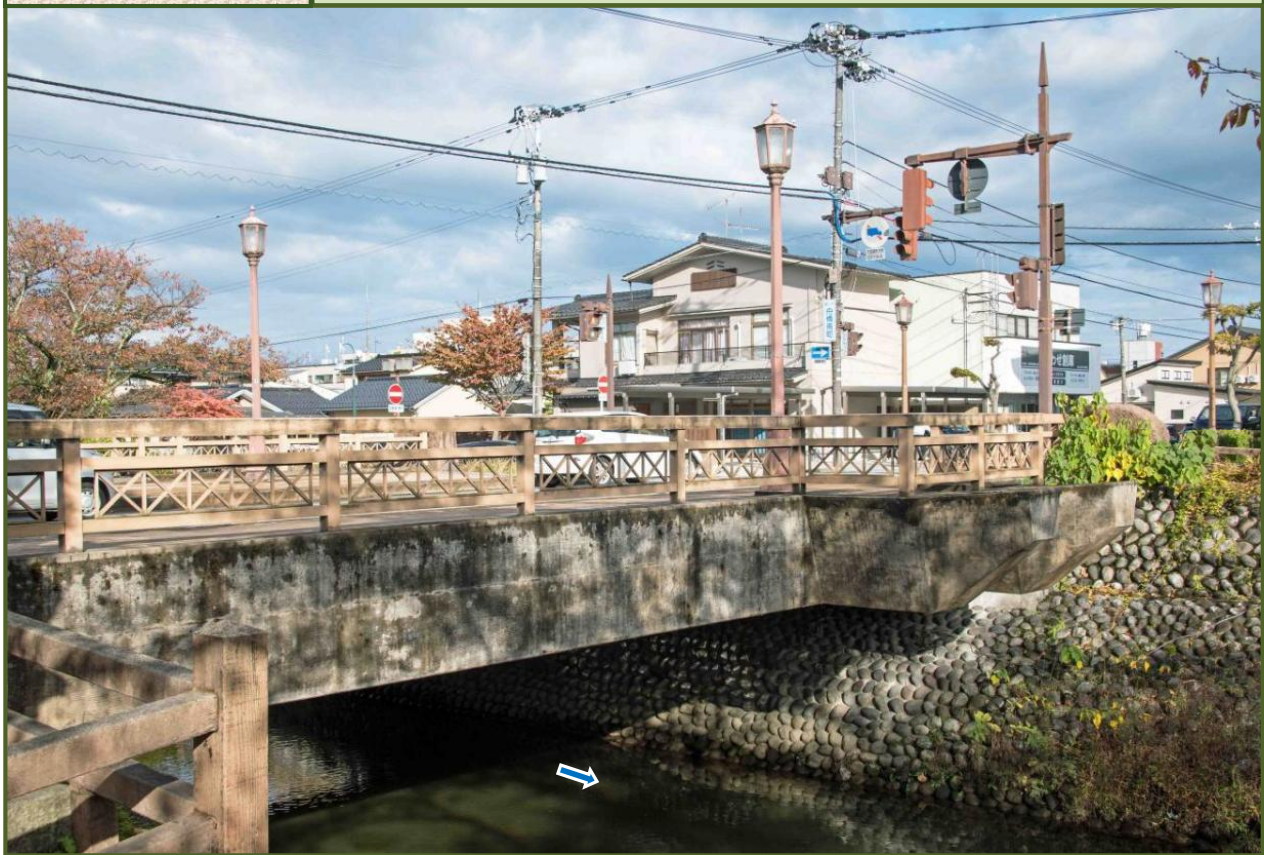


写真-1 松川に架かる舟橋（令和2年11月）

■ 浮世絵『六十余州名所図会・越中富山船橋』から秀吉軍の加古川渡河の様子をイメージする

写真-2 の浮世絵は、歌川広重^{*1}が描いた『六十余州名所図会・越中富山船橋』です。江戸時代に神通川に架けられた日本一の船橋（舟橋）として有名だったそうですが、この絵に描かれた舟を筏に置き換えると、羽柴秀吉の軍勢が三木城攻めに向かう途中、加古川を渡るために地元の船頭らが架けたといわれている浮橋がイメージできると思います。（『ひょうご水百景～北播磨』No.131-1 参照）

富山県で最大の河川である神通川は、富山平野の背後にそびえる3,000m級の山々に水源を持ち、そこから一気に富山湾まで流れ込むとても流れの速い川です。春には雪解け水で増水、川幅が広がり橋の架けにくい川だったようです。

その神通川に架けられた船橋は、川の流れにより大きく下流側に弧を描き、そのダイナミックな姿が多くの浮世絵などに描かれています。『東遊記』など多くの紀行文で他国に紹介されたことにより、城下町の中央を流れる日本一の船橋として全国に知られることとなり、立山と共に越中名所の一つだったそうです。

その船橋が架かっていた所の今が写真-1 です。この付近で大きく蛇行していた神通川は、明治時代に直線化され、旧河道はほとんどが埋め立てられて、旧河道の一部が松川およびいたち川として残されています。



写真-2 『六十余州名所図会・越中富山船橋』

※1 歌川広重：寛政9（1797）年～安政5（1858）年。浮世絵師で本名は安藤重右衛門。かつては安藤広重（あんどうひろしげ）とも呼ばれたが、安藤は本姓、広重は号であり、両者を組み合わせて呼ぶのは不適切で、広重自身もそう名乗ったことはない。江戸の定火消（じょうひけし）の安藤家に生まれ、家督を継ぎ、その後に浮世絵師となった。風景を描いた木版画で大人気の画家となり、ゴッホやモネなどの西洋の画家にも影響を与えた。天保4（1833）年、傑作といわれる『東海道五十三次』を描いている。

■ 加賀藩主・前田利長が富山に隠居した慶長10年に舟渡しから船橋に切り替えられた

富山城は、天文12（1543）年頃に（異説あり）築城されていますが、その頃に城の北側を流れる神通川に「舟渡し」が設けられたといわれています。

慶長10（1605）年、前田利長（前田利家の長男で加賀藩初代藩主）は、加賀藩主を利常に譲り富山城に隠居します。富山城は改修され、町割りが行われ、新しい城下が整備されました。この時、北陸街道が神通川を渡る箇所に舟渡しに替えて船橋が架けられています。

富山は、北陸街道と飛騨街道が交わる交通の要衝で、加えて陸上輸送と神通川を利用した舟運の接点でもありましたが、神通川は富山城の外堀でもあることから安易に橋を架けるわけにもいきません。そこで、いざというときは舟を繋いでいる鎖を切れば通行できなくなることから船橋が採用されたのではないのでしょうか。



写真-3 富山城址（令和2年11月撮影）



写真-4 前田利長（Wikipedia から引用）
魚津歴史民俗博物館所蔵

当初の船橋は、32艘の舟を並べて板を置いただけのものでしたが、その後、52艘の舟を太綱で繋ぎ、その上に木の板を3枚ずつ並べて人を通らせました。その後、太綱は激しい流水に耐えられるよう鉄鎖2条とし、舟も当初の倍の64艘になりました。橋から落ちて亡くなる人が絶えず板は5枚に、さらに7枚にと増やされていきました。

船橋の架設もあって富山城下は人と物の往来で賑わいましたが、近代化に伴う交通量の増大、架橋技術の進歩などから、明治15（1882）年「木橋」（写真-11）に架け替えられ、船橋はその姿を消しました。

左岸側の常夜燈の傍には、写真-5 のような「越中富山 神通川船橋址」の説明板が富山市によって立てられています。

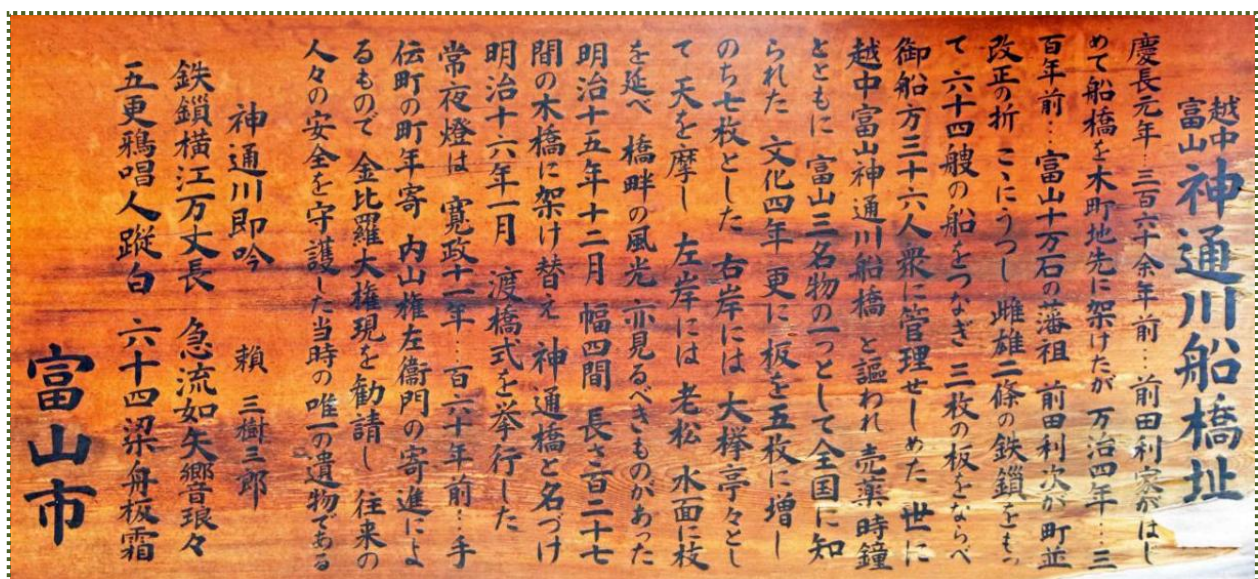


写真-5 「越中富山 神通川船橋址」の説明板

■ 「越中富山船橋」の今

神通川の旧河道を流れる松川に架けられた舟橋(写真-1・8)は、かつて日本一の舟橋があったところで、舟橋の親柱には、歌川広重と山下守胤が描いた船橋の絵(エッチング)がはめ込まれています(写真-6・7)。

また、舟橋の橋桁には往時の船橋がモチーフとしてデザインされています(写真-1・8)。舟の舳先(へさき)は当然のことながら上流を向いています。

寛政 11 (1799) 年、往来の人々の安全を祈願して、町年寄・内山権左衛門が寄進した 2 基の常夜燈(写真-9)が唯一当時の姿をとどめています。旧神通川の両岸の袂(たもと)に設置された常夜燈間の距離は約 250m で、これで当時の神通川の川幅が推定できます。



写真-6 舟橋の親柱にはめ込まれた歌川広重の「越中富山船橋」図会



写真-7 舟橋の親柱にはめ込まれた山下守胤の「富山城神通川船橋図」



写真-8 松川に架かる舟橋（上流側）



写真-9 左岸側の常夜燈（左）と右岸側の常夜燈（右）

■ 神通川の馳越線工事（蛇行部の直線化）

話が少し横道に逸れます。明治時代、富山の人々は毎年のように起きる神通川の大洪水に苦しめられていました。洪水の度に多くの人命と財産が失われる中、抜本的な解決策として実施されたのが「神通川馳越[※]²線（はせこしせん）工事」です。

これは、大きく東にU字状に屈曲して流れていた神通川を直線化する分水路新設工事(国庫補助率 33%)で、明治 34 (1901) 年から 36 (1903) 年にかけて行われました。

この工事は、オランダ人技師、デ・レーケが提案したのですが、費用が相当高額になることから、「新河道の施工を安くあげるには、新河道に低水路を掘削し、残りは洪水時の掃流力を利用して開削する方法があるが、下流域を破滅させることからやってはいけない」としていました。



図-1 神通川馳越線工事図（国土交通省HP「神通川の歴史」から引用・加工）

明治 29 (1896) 年、32 (1899) 年と相次いで洪水に見舞われたことから、富山県は抜本的な対策として蛇行部を直線化することとし、財政的に苦しい状況だったためやむなく禁断の手、デ・レーケがやるべきでないと言っていた方法を選択します。

工事直後の馳越線の水路幅はわずか 2m、深さ 1.5m でしたが、その後、洪水のたびに新しい水路に流水が流れ込み、その掃流力で少しずつ川幅は広がっていきました。大正 3 (1914) 年に起きた洪水では、ついに旧神通川にほとんど流水が流れなくなりました。

当時、分水路に架設された神通大橋は、洪水により川幅が広がることを見越して、長さ 410m の橋を架けています。

分水路が本流になったことから、旧流路と分水路の間を堤防で締め切ることになり、大正 10 (1921) 年には上流部に、同 14 (1925) 年には下流部に堤防が築かれました。

その後、廃川敷となった旧流路は一部を残して埋め立てられ、そこには富山県庁や富山市役所、NHK、教育文化会館など多くのビルが建設されました。



写真-10 越中富山の船橋

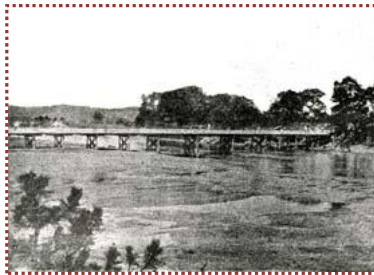


写真-11 明治中期の神通川と神通橋

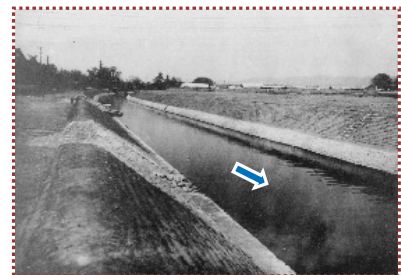


写真-12 神通川旧流路の名残（松川）

(写真-10～12 は、富山市郷土博物館の『博物館だより』から引用・加工)

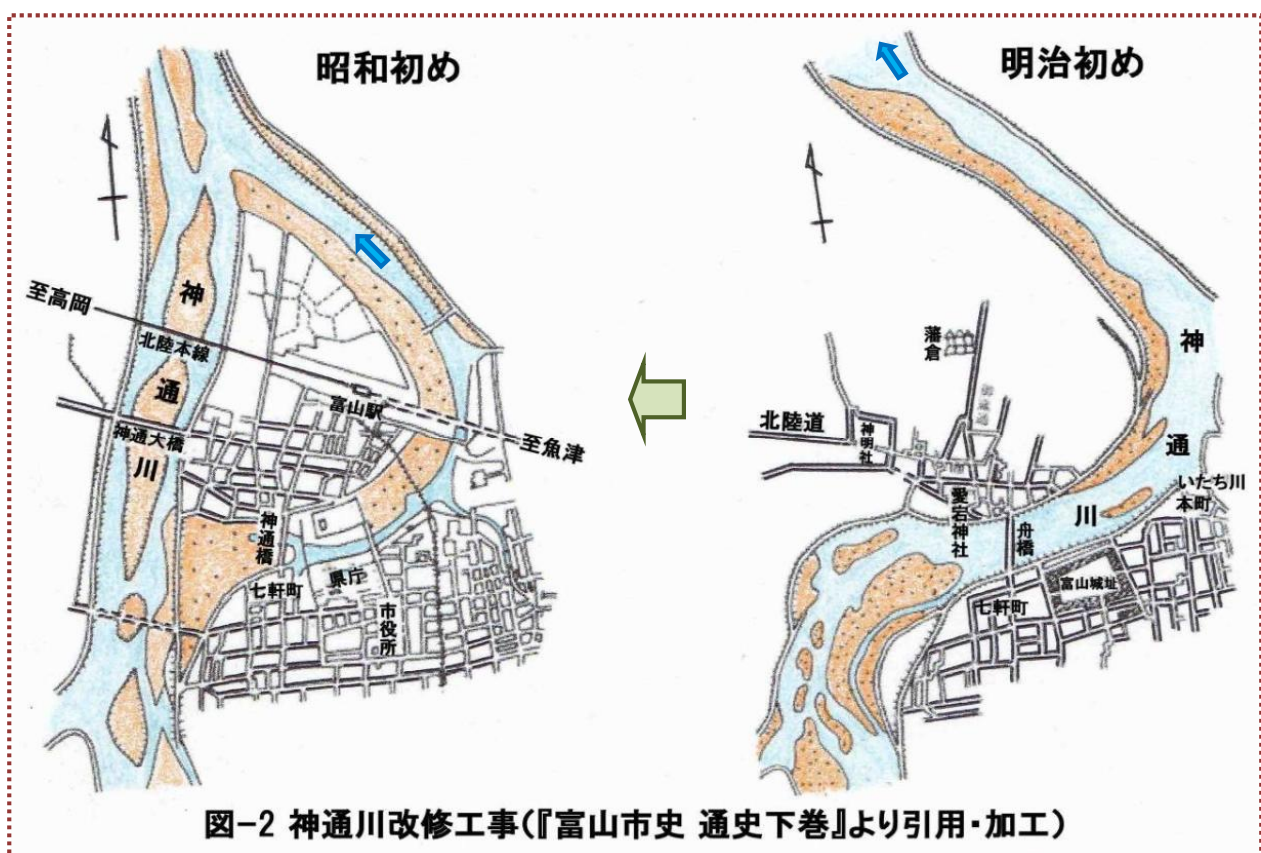


図-2 神通川改修工事(『富山市史 通史下巻』より引用・加工)

※2 馳越：馳せるとは、水が堤防を越えてほとばしり出るという意味の言葉で、馳越は富山県だけで使われる土木工事用語。

■ 目新しい手法ではなかった船橋

堺屋太一著作集の第10巻『秀吉～夢を超えた男』の中に以下のような記述があります。

天正3(1575)年の頃の話、「去年から始まった道普請。信長は諸国の主街道は幅三間二尺(≒6m)、脇道は幅二間(≒3.6m)と定めて道普請を命じた。路面は石を除き、川には船橋を繋ぎ、沼には土手を築き、道の両側には松や柳の並木まで植える凝りようだ。」

このことから、川に船を繋いで並べ橋の代わりをさせる、というのは、当時特に目新しい手法ではなかったようです。

図-3の松川およびいたち川の流路が旧神通川で、それらの川沿いの道路や街の区画から神通川の旧河道が見えてくるといえます。そして富山県庁や富山市役所は、神通川の旧河道埋立地に建てられています。かつて船橋があったことを示す常夜灯のある場所は、船橋南町と船橋北町の赤丸の所です。



図-3 神通川馳越部の現在の状況

■ モノローグ

令和2(2020)年の11月初旬に「Go to トラベル」を使って、恵那峡から阿寺溪谷・寝覚ノ床経由で高山へ、翌日は神通峡、八尾を通して富山へ、3日目は富岩運河や富山城址を散策し、その後庄川峡を経て下呂温泉の3泊4日の旅行に行ってきました。高山では飛騨牛を食べ、富山では鮎を食べ、下呂では……何を食べたかな？

今回の号はその時に仕入れたネタです。神通川改修は、デ・レーケも関係していて興味深い話がたくさんありました。それにしても「禁断の手」を実際に使うとは驚きです。弊害はなかったのでしょうか。

富岩運河環水公園

明治時代、馳越線工事により分水路が本川となった結果、市街地の真ん中に出現した広大な廃川敷が街を分断し、都市発展の障害となっていた。そこで運河を開削し、その掘削土で廃川敷を埋め立てるという都市計画事業を実施、昭和9（1934）年に完工した。工場への水運に活躍した富岩運河だったが、高度経済成長期に入ると木材貯木場と化し、周辺からの廃水が流れ込んでヘドロが推積する有様。60年代に入って新たなウォーターフロント構想のもと、富岩運河も整備計画の中に位置づけられ、親水公園として整備が行われた。



写真-13 富岩運河環水公園

【参考資料】

- 1 『神通川の歴史～江戸時代に架けられた船橋、馳越線工事、富岩運河開削』 国土交通省 HP
https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0411_jintsu/0411_jintsu_01.html
- 2 『秀吉～夢を超えた男』 堺屋太一著作集・第10巻 平成29年6月
- 3 『舟橋、歌川広重、前田利長、富山城』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』
- 4 『博物館だより No.18,29,30,45』 富山市郷土博物館

※発行：令和3（2021）年8月 『ひょうご水百景』 No.131

改訂：令和8（2026）年6月 『ひょうご水百景』 No.131-2